第20号

Anchor

アンカー

「迫り来る戦い」

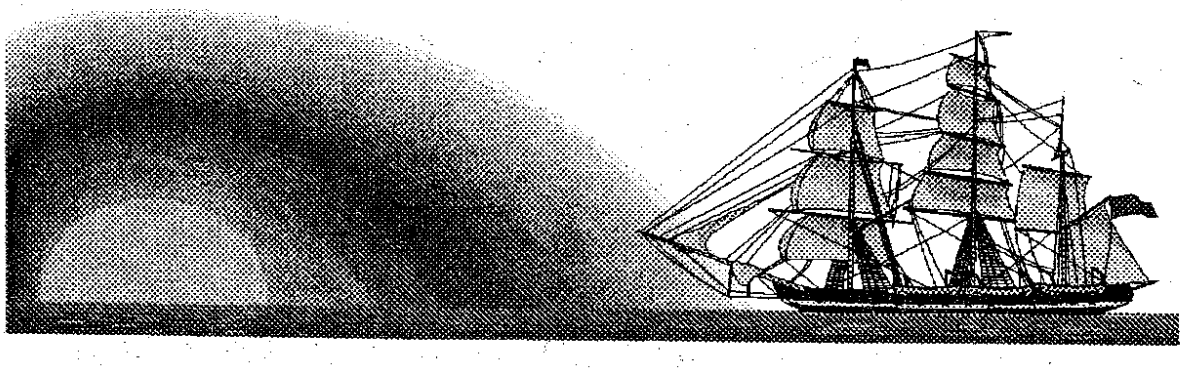
Just Before

F.M

「迫り来る戦い」

序論 1
Ⅰ. 敵を知る 1
Ⅱ. 時を知る 8
Ⅲ. 備えを知る 21

「どんなに人間の知力の発達があろうと、さらに大きな光を求めて徹底的に、絶えず聖書を探求する必要はないと考えてはならない。民として我々は、預言の研究者となるように召されている。我々は神が送ってくださるどんな光であっても認識できるように熱心に見守っていなければならない。我々は真理の初めの落ち穂をつかまなければならない。注意深い祈りによって、明確な光を確保して、他に提示できるようにしなさい。...神の民が現在の理解で安心し、満足しているなら、神はお喜びにならないのは確かである。彼らに輝くいや増す光を受け入れるために前進することは神の御心である。現在の教会の態度は神に喜ばれるものではない。そこにはもうこれ以上の真理と大きな光の必要を感じないような自己満足がある」5T 708、709



「迫り来る戦い」

十字架の軍旗を掲げて

序論

4月２３日、ついにペルー日本大使公邸人質事件は一挙に解決した。和戦解決の狭間にあって、長い間苦悩してきたフジモリ大統領は、シプリアー二大司教との対話の後、強行突入を決断したらしい。

政府側は驚くほどの方法で内部の綿密な情報をキャッチしていた。4ケ月前から大使公邸そっくりな建物を建て、何時、誰がどこの部屋にいるか、敵はどんな戦略をとるかを想定しての徹底的な訓練をしていた。そして、日本政府に相談する暇もないほどの緊急事態と判断して、迅速な強行手段に出たというのである。武装グループが公邸の大広間でくつろいでサッカー遊びに興じていたそのすきを狙った。

専門的な判断は、こういうことは、月も出ない真夜中に特殊照明を用いてやるというのが常識であるらしい。しかし、真昼間、逆を狙った。事件の真相はよく分からない部分もあるが、大切な教訓を学ぶことができる。

戦いにおいては、敵とその戦略を知ること、時ータイミングを知ること、備えー攻撃と防備を知ることが非常に重要である。まず正しく情報を把握することが正しい時に正しい行動をさせるのである。

我々も、十字架の軍旗をかざして行進命令を待機しているキリストの兵卒である。日曜休業令が発布される前を「迫り来る戦い」と呼び、日曜休業令が立てられてから後を「最後の戦い（闘争）」と呼んでいる。（大争闘序7、大争闘36章、クリスチャンの奉仕108、EV30）

その戦いとはどんな戦いであろうか？

「真理と誤謬の最後の大争闘は、長い間続いてきた神の律法に関する最後の戦いにほかならない。われわれは今や、この戦い、すなわち、人のおきてと主の戒めとの間の、また、聖書の宗教と作り話しや言い伝えの宗教との間の、戦いに入っているのである」大下344。

龍と獣と偽預言者と、神の戒めを守りイエスのあかしを持っている者たちとの戦いである。すなわち、心霊術、バチカン、一般諸教会及び「地の王たち」の連合と、セブンスデー・アドベンチストとの戦いである。（ヨハネの黙示録12:17;ヨハネの黙示録16:13-16;17:13-14）。

Ⅰ．敵を知る

ギデオンは敵をよく知っていた。ミデアン人、アマレク人、東方の民の連合軍は、いなごの如く、海辺の砂のような大軍であったのに比べて、ギデオンの軍隊はたった３００人であった。しかし、敵の情報をよく捕えていて、戦略を

練った。３００人を３組に分けた。ラッパと、からつぼの中にたいまつをともし、ちょうど番兵が交代した時を見計らって闇の中で三方からいっせいにつぼを打ち砕き、ラッパを吹き、「主のための剣、ギデオンのための剣」と大声で叫んだので、敵は驚き、慌てふためいて同士討ちしながら逃げて行った。

クロスがバビロンを陥落させた時、各国から千人の大臣たちを招待して、大宴会を催した。「王宮の宴会に出席していた客の中には魅惑的な美しい女たちがいた。才能のある人や教育のある人がいた。総督たちや政治家たちは、酒を水のように飲んで気も狂わんばかりに騒いだ」。メデア・ペルシャの連合軍は、このような状態を予知して、これをバビロン攻略の好機と定めた。それは運命の日となったのである。

野球でも、相撲でも何であっても、今は戦う相手の戦略、弱点を研究するためにビデオ、コンピューターが使われる。どんなチャンピオンにも泣き所があり、威力を誇る新鋭兵器にも死角があるとか...。

経済戦争においてもそうである。経済評論家の浅井隆氏は、「重要な問題は情報の分析と戦略の立案だ」と言っている。「では、CIA(アメリカの中央情報局)の本当に優れているところは何か。それこそ情報分析力です。情報分析の担当者、アナリストといわれている連中が実に優秀だったのです。彼らが国家戦略立案の基礎となる情報を膨大な情報の中から選び分析していくのです。その分析を戦略立案の責任者である大統領をはじめとする政府担当者に上げていくわけです。日本に欠けているものは、情報の収集力ももちろんですが、それ以上にその情報分析力であり、それにもとづく戦略立案能力なのです」。９５年の衝撃1165。

クリスチャンはサタンとその勢力と戦うように召されていることを忘れてはならない。また、セブンスデー・アドベンチストという教会も、サタンの勢力と戦うために最後に立てられた団体であることを忘れてはならない。

サタンが最も恐れること

「**この大欺瞞者サタンが最も恐れていることは、われわれが彼の策略を見破ることである**」大争闘下258。

だからサタンはどうするだろうか？「自分と自分のやり方を隠すのが、サタンの手である」同。なぜそうするのか？「われわれが彼ら(悪魔と悪天使)の策略に無知である限り、彼らはわれわれには想像もつかないほど優位にある」(同257)からである。

今日、我々の教会でダニエル、黙示録の預言の研究、迫り来る戦い、危機についてほとんど聞かれなくなった。警告のラッパの音は止んだのだろうか。

我が教会の使命は、三天使の使命であるとよく聞かされる。

第三天使の使命は、肯定的な面と、否定的な面、両方ある事を覚えていなければならない。すばらしい約束と厳粛な警告の使命である。肯定的な面、すなわちキリストによる救いだけを強調し、否定的な警告の使命を説かないと第三

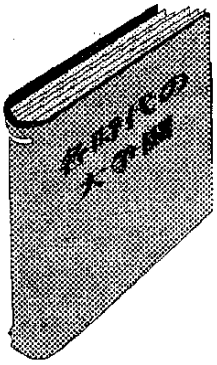
天使の使命を説いていることにはならない。ついにはセブンスデー・アドベンチストの存在理由と、アイデンテイテイ（独自性）を失い、惨めな教会になってしまうであろう。

「この危機の時に当たって、キリストに従う者たちは、主の再臨の警告を世に伝えねばならない」大争闘上（序7）。

第三天使の使命は、永遠の福音である、信仰による義認そのものである。しかし、その説き方は一般キリスト教会とほとんど変わらなくなっている。再臨信徒でありながら、キリストの再臨に我々を備えるために、完全に、永久に罪の除去をするために至聖所に入られたイエスに人々の目を向けさせない。最後のあがないに目を向けさせないで、十字架であがないは終わったというバビロンの教えに後戻りしている。キリストは至聖所において「ご自分のために、完全で十分な許しと義認」（大争闘下216）を懇願なさっておられるのに、バビロンの信仰による義で満足し、我々は広い道を歩んでいる。バビロンから来た、歌えや、祝えやのセレブレーション・プログラムに魅了されている。主の僕は「わたしは、第三天使が、上の方を指さして、失望した人々に天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た」（初代文集114）と言っている。セブンスデー・アドベンチストの福音は、神が十字架で始められた働きを、至聖所で完成なさるあがないを意味する（大争闘下222）。完成された民、罪なき完全な、栄光の姿の民を迎えにおいでになる、これがセブンスデー・アドベンチストの福音なのである。永久にして、完全な義認が提供される。これほどすばらしい福音を、創造主イエス、救い主イエス、大祭司イエス、王の王イエスが提供しておられるのである。「第三天使の使命は実に信仰による義認そのもの」（1SM 327）なのである。

「各時代の大争闘」の本

最近は「各時代の大争闘」に対する軽蔑じみた言葉さえ聞こえて来る。１８８８年以来、ホワイト夫人の強調は変わった。信仰による義の強調に変わり、福音的になったという。Ｅ．Ｇ．ホワイトは、「各時代の大争闘」の本について何と言っておられるだろうか。１９１１年に彼女はこう言われた：



「この大争闘の本をわたしは銀や金よりも高く評価している。それを人々に優先させることを強く望んでいる．．．。」w-56, 1911.

１９０５年にこう言われた：

「わたしは、わたしが書いた他のどの本よりもこの本を広く配布されることを見たいと切望している」k-28-1905.

１８８８年の信仰による義認のメッセージに歓喜した預言者は、その後、警告に満ちた「大争闘」の本について、なぜそのように言われたのだろうか？「大争闘」こそ積極的な約束の使命と厳粛な警告の使命が麗しく調和した本だからである。これこそ偽りの教え、偽リバイバルを識別させてくれる本だと私は確信している。

第三天使の警告の使命は教会を奮起させるように計画されているのであるが、その役割を果

たしていない我々の教会に次のような警告が預言者によって与えられている:

「もし、わが民が今日までのような、のんきな態度を続けているならば、神は彼らの上にそのみ霊を注ぎたもうことはできない。... 今彼らはかつてない警戒と一致した行動の必要を感じなければならない。第三天使の特殊な働きは、その重要性を認められないできた。... 光、すなわちわが民がこのときのために必要としていたその現代の真理が彼らから遠ざけられていたということは、神のご指示によるものではなかった。第三天使の使命を伝えているすべての牧者は、何がその使命を構成しているかを知らないのである。・・・・民は現代の危険について覚醒させられる必要がある。見張人は眠っている。われわれは幾年も時勢に遅れている。夜番の頭は危険を見つけるために与えられた機会を逸することのないように注意する差し迫った必要がある。

もし、カンファレンスの指導者たちが、神の送りたもう使命を、今受け入れて一列となって行動を共にしなかったならば、諸教会は大いなる損失をこうむるであろう。・・・・・・しかし、あまりにも度々、指導者はためらって立ちながら『あまり急ぐことはよそう。そこにまちがいがあるかもしれない。まちがった警報を発してはいけないから』と言ってきた。彼のあやふやなちゅうちょしている有様は『平安無事』を叫んでいるのである。

『興奮してはいけない。おそれてはならない。この宗教修正問題は必要以上に大さわぎをされている。この動乱はおさまってしまうであろう』。

このようにして、彼は神よりおくられた使命を事実上否定し、そして教会を奮起させるように計画された警告はそのなすべき働きをなさなかった。番人のラッパは特別の音をたてず、そして民は戦いの準備をしない。番人のちゅうちょと遅滞によって魂は滅びるままに捨ておかれるであろう。そして彼らの血は彼の手に求められるであろう」。(教会へのあかし5巻p714～6英文)

日曜休業令が間近に迫っているのに、それはシナリオ通り来ないのだ、人々を威嚇してはならない、福音を説くのだ、１９５７年以来、わが教会は他教派から受け入れられ、福音的になった、主を賛美しようと、セレブレーション(祝典)的、エキュメニカル(教会合同)的合唱が教会に鳴り響くようになった。そもそも１８８８年、１９５７年のエピソードを歪んで理解していることが「アドベンチストの焦燥」の原因と解している人は少なくはない。レビューの元編集長ケネス・ウッズは、非公開の論文で、今日の教会の状態の原因は１９５７年の福音派のバーンハウスーマーチン博士らとの妥協に原因があると指摘している。

ローマの悪を暴露するために召された教会

「我々が住んでいる、まさにこの時代に主はご自分の民を召され、伝えるべきメッセージをお与えになった。主は罪の人(不法の者)の悪を暴露するよう召されたのである。」牧師への証118、(1903)。

ローマ法王教の狙いは①「世界支配陰謀」②「迫害の復活」③「プロテスタンテイズムの破壊」である。それを真に暴露することができる

のは、セブンスデー・アドベンチストだけである。それをしなくなったために、日本では赤間剛氏、イギリスのアブロ・マンハッタン、アメリカの元イエズス会－アルバート・リベラ、デビッド・ハントらが叫んでいるのである。また元イエズス会、教皇庁神学校の教授－マラカイ・マーチン（ベストセラー「血の鍵」の著者）は、ヨハネ・パウロ2世の戦略を明らかにしている。これらの方々は事実を述べていたとしても、真に間違いのない神からの警告、メッセージを伝えることができるのは、セブンスデー・アドベンチスト以外にないはずである。

E.G.ホワイトは次のように言っている:

「ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行ったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。カトリック教は至るところで地歩を占めつつある」大争闘下321、322。

この引用文は一冊の本を書くに至らしめる程のすごい言明である。

余談になるが、言わせてもらいたい。新共同訳聖書は「プロテスタントが行ったすべてのことを無効にするためのあらゆる手段」の一つなのである。エキュメニカル（教会合同）事業なのである。バチカン第二会議で打ち出された戦略であることを私は幾たびも指摘した。プロテスタント主義の「聖書、聖書のみ」をつき崩すのが狙いである。

E.G.ホワイトが金銀よりも高く評価された「大争闘」の本は何を目的として書かれたのであろうか:

「本書の目的は、過去の争闘に関する新しい事実を提示することよりも、むしろ未来の諸事件に関する事実と原則とを明らかにすることである。...

真理と誤謬との間の大争闘の模様を解明すること、サタンの策略を明らかにし、これに抵抗して勝利する方法を示すこと、神は正義と慈愛をもって被造物を取り扱われるということが明らかになるよう、罪の起源とその最終的処置に関して光を投げかけつつ、悪という大問題に満足のゆく解決を与えること、そして神の律法が聖であって不変のものであることを明示すること――これらが本書の目的である」大争闘上（序10）。

サタンが大争闘の本を憎む理由が分かる。

「人々は法王制の真の性格、またこの教会が支配権を得たとき心配される危険に対して目を閉じている」（大争闘下322）。

知らせてくれるものがない「人々」ならまだしも、「セブンスデー・アドベンチスト」はどうだろうか。「政治的また宗教的自由に対するこの最も危険な敵の進出に反対（抵抗）するように、人々は目覚める必要がある」（同上）。人々を目覚めさせるのはセブンスデー・アドベンチストの働きであり、そのために証の書が与えられているし、ダニエル書、黙示録の封印を解く光が我々に与えられているのである。

エルサレムに敵が近づいているのを見せられた預言者エレミヤは、神からの警告の使命をイスラエル人(第七日安息日初臨教団＝セブンスデー・アドベンチスト)に伝えた。

エレミヤの警告

「ユダに告げ、エルサレムに示して言え、「国中にラッパを吹き、大声に呼ばわって言え、『集まれ、われわれは堅固な町々へ行こう』と。シオンの方を示す旗を立てよ。避難せよ、とどまってはならない、わたしが北から災と大いなる破滅をこさせるからだ」エレミヤ書4:5、6

「ベニヤミンの人々よ、エルサレムの中から避難せよ。テコアでラッパを吹き、ベテハケレムに合図の火をあげよ。北から災が臨み、大いなる滅びが来るからである。わたしは美しい、たおやかなシオンの娘を滅ぼす。

牧者たちは、その群れをひきいて来て、彼女を攻め、彼女の周囲に天幕を張る。群れはおのおのその所で草を食う。「戦いを始め、彼女を攻めよ。立て、われわれは真昼に攻撃しよう」。「わざわいなるかな、日ははや傾き、夕日の影は長くなった」。「立て、われわれは夜の間に攻撃しよう、そして彼女のもろもろの宮殿を破壊しよう」。エレミヤ書6:1-5。

しかし、選民イスラエルは涙の預言者の警告にどのように反応するだろうか。

「彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている」。エレミヤ6:14

「彼らは主について偽り語って言った、『主は何事もなされない、災はわれわれに来ない、またつるぎや、ききんを見ることはない。預言者らは風となり、彼らのうちに言葉はない。彼らはこのようになる』と」。エレミヤ5:12、13。

「主はこう言われる、「あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ。しかし彼らは答えて、『われわれはその道に歩まない』と言った。わたしはあなたがたの上に見張びとを立て、『ラッパの音に気をつけよ』と言った。しかし彼らは答えて、『われわれは気をつけることはしない』と言った」。6:16、17。

神の愛の警告に対する選民イスラエルの拒否反応に対しての預言者の嘆きに耳を傾けてみよう:

「ああ、わがはらわたよ、わがはらわたよ、わたしは苦しみにもだえる。ああ、わが心臓の壁よ、わたしの心臓は、はげしく鼓動する。わたしは沈黙を守ることができない、ラッパの声と、戦いの叫びを聞くからである。破壊に次ぐに破壊があり、全地は荒され、わたしの天幕はにわかに破られ、わたしの幕はたちまち破られた。いつまでわたしは旗を見、またラッパの声を聞かなければならないのか。「わたしの民は愚かであって、わたしを知らない。彼らは愚鈍な子どもらで、

悟ることがない。彼らは悪を行うのにさといけれども、善を行うことを知らない」エレミヤ書4:19-22。

エレミヤは、真実な愛をもって強く迫る神の警告と自分の愛する民の無関心、強情に号泣する。同胞の慰めを求めるが、神以外の慰めは来ない。哀歌を読んで預言者の気持ちに同情し、神の豊かな慰めにあずかれば、至聖所において最後の執り成しをされるイエスの苦しみに同情する気持ちが起るかもしれない。

誰がイスラエル（セブンスデー・アドベンチスト合唱団）の合唱「平和だ、無事だ」の指揮をしたのだろうか？

「わたしは言った、『ああ、主なる神よ、預言者たちはこの民に向かい、『あなたがたは、つるぎを見ることはない。ききんもこない。わたしはこの所に確かな平安をあなたがたに与える』と言っています。

主はわたしに言われた、『預言者らはわたしの名によって偽りの預言をしている。わたしは彼らをつかわさなかった。また彼らに命じたこともなく、話したこともない。彼らは偽りの黙示と、役に立たない占い、および自分の心でつくりあげた欺きをあなたがたに預言しているのだ。

それゆえ、わたしがつかわさないのに、わたしの名によって預言して、『つるぎとききんは、この地にこない』と言っているあの預言者について、主はこう仰せられる、この預言者らは、つるぎとききんに滅ぼされる」エレミヤ書14:12－15。

現代の預言者がこれらの聖句について現代風に当てはめているのを、「初代文集」「大争闘」に見て頂きたい。敵を知らない、敵の策略を知らないことはどんな悲惨な結果を招いただろうか？紀元前606年にエルサレムがバビロンによって陥落し、紀元70年にエルサレムが再び陥落することになった。

情報戦

我々の戦いも情報作戦にかかっていることを知らなければならない。我々の敵は我が教会の内部を知り尽くしているはずである。ローマ法王教は世界最大の情報網を持っていると言われている。

「ローマ・カトリック教会は全世界にわたって根を張り、法王庁の支配下にあってその利害に役立つよう計画されている一大組織を形成している。全世界のあらゆる国において、聖さんにあずかる幾千万の者たち（伝達、通知者）は、法王に対する忠誠を堅く保つように教えられている」大争闘下339。

小松左京氏は「最大の情報国家」と呼んでいる。赤間剛氏の「バチカンの秘密」から引用してみよう:

「バチカンはCIA,KGBと並ぶ最大の情報機関である。膨大な数の役識者からバチカンへ現地のさまざまな情報が寄せられるのである。バチカンの戦略はこうした正確な情報から生まれるのである。バチカンに詳しい国際評論家の倉田保母氏はこういっている。『バチカンの情報力はすごいものがある。５０万人近

くの司教や神父が全世界で１０年２０年と現地で"定点観測"して、バチカンに報告している。バチカンに集るデータはKGB,CIAなんか問題じゃないと思う。ですからカザローリ枢機卿は世界で一番正確な情報を持っているといわれる。私自身もナミビア(南西アフリカ)取材で、世界中のジャーナリストが現地の教会へ情報を取りに行ってみる現場を見て驚いたことがあります。日本の外務省、マスコミもバチカンと教会を利用したらよいと思いますね』バチカンは情報機関としても世界一だというのである」p118。

しかし、神は残りの民に「イエスの証」、預言の霊を与えておいでになる。これは神からの直接の情報、啓示であり、敵とその戦略、また神の戦略についてこれほど詳しく、正確な情報を与えてくれるものが他にあるだろうか。

遅すぎない間に敵を知り、己を知り、十分に戦いの備えをすべき時ではないだろうか。

「刈入れの時は過ぎ、夏もはや終った、しかしわれわれはまだ救われない」(エレミヤ書8:20)

Ⅱ.時を知る

時と行動

①時を知ることは、②何をなすべきかを教えてくれる。この二つは密接な関係がある。神はご自分の僕を立てて「時に応じて食物」(マタイ24:45)を与えられる。各時代に与えられる特別な真理を「現代の真理」と呼ぶ。神がその時代に与えられる情報を正しく知ることから、その時代に何をなすべきか、どんな備えをすべきかが分かり、正しい行動ができる。「その時」を知らず、正しい情報を得ないと、その時の「義務」を知り、「正しい行動」をすることができない。しかし、どんなに正しい情報を得ても、それが行動に移されるかはまた別問題である。賢い乙女と愚かな乙女の違いがそこにある。とは言え、まず正しい情報を得ることが優先である。さもなければ狂信、異端に陥るか、無関心、冷淡、ラオデキアに陥るかのどちらかである。

「真理には、どの時代にも新しい発展があった。つまり、時代ごとに、その人々のための特別の神からの使命があった。古い真理はみな重要である。新しい真理は古い真理から切り離されたものでなく、古いものの解明である。古い真理を理解して始めて、新しい真理を悟ることができる。キリストが弟子たちにご自分の復活の真理を示して、『モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、御自身について記してある事どもを、説きあかされた』(ルカ24:27)。真理を新たに解き明かすことによって、輝く光が古いものをいっそう輝かしくする。新しい光を拒んでなおざりにする人は、実は、古いものを持っていない。それは、彼にとって、生きた力を失ったむなしい形式と化してしまうのである。」キ実105。

「牧師たちと民は、彼らが住んでいる時代に備えていない。現代の真理を知っていると自称しているほとんどの者が、この時代の準備の働きを理解する用意ができていない」1T466。

「イッサカルの子孫からはよく時勢に通

時を知って行なうこと

じ、イスラエルのなすべきことをわきまえた人々が来た」歴代上12:32

時の流れの中で、その時に何をなすべきかを知ることはどんなに重要であろう。預言の研究がわれわれにいかなる時代に住んでいるかを教えてくれるのである。預言を研究しなければ、ラオデキアに陥る。

新しい預言の解読！

「預言は闇に輝く光、訪れの時を知らせる時計
預言は過去、現在、未来の歴史書
預言は海図であり、羅針盤でり、錨である」

預言の研究に絶えず進んでいないと、闇に追いつかれてしまう。ペテロは我々に「いっそう確実な預言に...目を留めているがよい」(2ペテロ1:19)と勧めている。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」アモス書3:7

過去において、神はご自分の民を預言の光で導かれたのであれば、地球歴史最後の、最大の患難、迫害の時に関して、神の民の錨となるために詳しい、はっきりとした諸事件と預言の期間を与えておられることは当然である。しかし、我々は、１８４４年以来、預言の研究にあまり進んでこなかった。時に関する預言は、１８４４年でもう終わりという、E.G.ホワイトの言葉が曲解されてきたことが大きな原因であったようである。もう一つは預言の解釈を学者に頼っていたこともある。

「われわれの民には人に頼ったり肉なる者を自分の腕とする大いなる危険がある。自分自身のために聖書を調べ確証を考える習慣のない人々は、指導者に信頼している。そして彼らがなす決議を受け入れる。このようにして、もし、これらの指導的兄弟が、その民に神が送られる使命そのものを受け入れなければ、これらの人々もそれを拒むであろう。....誰も自分は神の民に対する光を全て持っていると主張すべきではない。主はこれをおゆるしにならない。『見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。』と彼は言っておられる。たとえ、われわれの指導者すべてが光と真理を拒んだとしても、そのとびらは依然として開かれたままである。主はこの時代のため、その民に使命を与える人々を起こされる」。(牧師への証p106、107英文)

「どんなに人間の知力の発達があろうと、さらに大きな光を求めて徹底的に、絶えず聖書を探求する必要はないと考えてはならない。民として我々は、預言の研究者となるように召されている。我々は神が送ってくださるどんな光であっても認識できるように熱心に見守っていなければならない。我々は真理の初めの落ち穂をつかまなければならない。注意深い祈りによって、明確な光を確保して、他に提示できるようにしなさい。...神の民が現在の理解で安心し、満足しているなら、神はお喜びにならないのは確かである。彼らが輝くいや増す光を受け入れるために前進することは神の御心である。現在の教会の態度は神に喜ばれるものではない。そこにはもうこれ以上の真理と大きな光の必要

を感じないような自己満足がある」5T708、709

さて、聖書には、「預言的期間」が最初からあった。洪水まで120年、洪水前の7日間、40日間の雨の期間、イスラエルのエジプト奴隷期間の430年、給仕役の長と料理役の長の3日間、パロの夢の7年間、イスラエルの荒野の放浪40年間、エリヤが預言した3年半の飢饉、バビロンの捕囚期間70年、ネブカデネザルの7年間、ユダヤ人のために定められた70週(490年)、法王至上権の1260年間、エルサレム再建命令から天における調査審判の開始まで2300年間、...と預言はみな確実にかつ正確に成就した。

それなりまで成就してない予言をよく研究しなければいけないと思う

預言の期間は、1844年で終わったのであろうか。我々は永遠の運命を決定する事件、ローマ法王教至上権の復活、日曜休業令の強要、最後の大迫害、地球未曾有の大患難、災害が全世界的な規模で来ることを知っている。聖書が預言しているし、世界の諸事件は、まさに新世界秩序構築が完成し、再びローマ法王教世界君臨が成ろうとする直前に来ていることを示している。神は最後の諸事件のクライマックスに関する預言的期間を我々に与えているだろうか。それとも1844年以後、いっさいそういう事は示しておいでにならないのだろうか。否、否である！

世の終わりのしるしとして、我々は戦争と戦争のうわさ、偽預言者、偽キリスト、民と民の争い、飢饉、地震、迫害、多くの人の愛が冷える、不法がはびこる...をあげる。しかし、これらのことは歴史上いつも起ってきた。確かに世の終末に近づくにつれて、ますます大規模に、頻繁に起るであろう。しかし、もっとはっきりとしたしるしはないのだろうか。もっとはっきりとした預言の期間が過去と同じように示されていないのだろうか。ダニエルはエレミヤの書からバビロンの捕囚の終わりの近づいているのを悟った。シメオンやアンナたちは、預言の研究からメシア出現の頃を認識していた。ウイリアム・ミラーなど、「60人の勇士」再臨説教者は世界各地においてほとんど同時にダニエル8：14の研究から、キリスト再臨の真理を発見した。再臨がその時になくて、彼らは大失望した。預言の研究をやり直して預言的期間の確かさを確認したが、イエスは調査審判、聖所の清め、最後のあがないのために至聖所に入られたという大真理を発見した。死せる義人のさばき開始の時であった。

終わりの時、永遠の運命を決定する諸事件がいつから始まり、どれくらいの期間続くのかということに関する啓示はないのだろうか。日曜休業令はいつ立つか、後の雨はいつ降るのか、恩恵期間はいつ終了するのか、いつ再臨するのかということをはっきり知りたい気持ちは誰しも持っている。そして幾たびも質問される。しかし、ここではっきり神の言葉に耳を傾けておかなければならないことがある。それはこれらのことに関しての日時はどこにも示されていないということである。「だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである」マタイ25:13。再臨の日時は、再臨直前に「天からのみ声」(大争闘下418)で初めて発表される。

キリスト再臨の時、約束の後の雨、伝道完成がこれほど延びてしまったので、我が教会に

は、不信と無気力が蔓延している。「人の子よ、イスラエルの地について、あなたがたが『日は延び、すべての幻はむなしくなった』という、このことわざはなんであるか」（エゼキエル書12:22）と主は言っておられる。

しかし今、我が教会で再び預言の研究が盛り上がっているようである。

「それゆえ、彼らに言え、『主なる神はこう言われる、わたしはこのことわざをやめさせ、彼らが再びイスラエルで、これをことわざとしないようにする』と。しかし、あなたは彼らに言え、『日とすべての幻の実現とは近づいた』と」エゼキエル書12:23

世の終わりはいつ来るのだろうか。はっきりとしたしるしがあるだろうか。

1．マタイ２４章によると、まず福音のあかし、世界伝道が完成する。

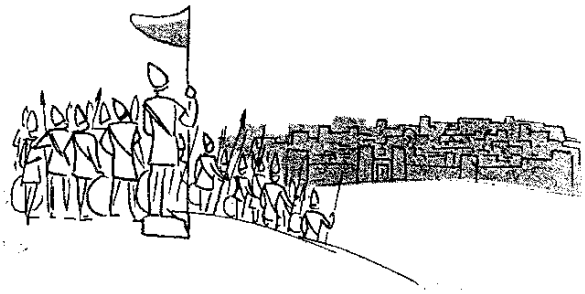
「み国の福音は、すべての民にあかしをするために、全世界に述べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」（14）。しかし、これだけでは、世界伝道はいつ終わるか分からない。このままでは、気の遠くなるような話しである。

2．「荒らす憎むべき者が聖なる場所に立つ」

マタイによる福音書24:15、26にイエスは世の終わりのしるしとしてもっとはっきりと言われた：

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ」と。

「荒らす憎むべき者」という表現が聖書に６回出てくる（ダニエル8:13;11::31、32;。12:11;マタイ24:15;マルコ13:14;ルカ21:２０）それはローマを指す。異教ローマ、法王教ローマの両方である。



これはエルサレム滅亡の近いことの確かなしるしとして与えられたことは、誰もが認めるところである。しかし、それは世の終わりの正確なしるしとして未来に起ることであると、聖書と証の書は言っている：

「エルサレムの滅亡は、世界を襲う最後の滅亡の象徴である。エルサレムの破滅によって部分的成就を見た預言は、もっと直接的には、最後の時代に適用されるべきものである」祝福の山151。

ダニエル書からもそのことははっきり分かる。ダニエル書最後の11、12章の幻は、「末の日に、あなたの民に臨まんとする事を、あなたに悟らせるためにきたのです。この幻は、なおきたるべき日にかかわるものです」ダニエル10:14。「末の日」というのは、ダニエル11章40

節以降の預言、すなわち、無神論権力－共産主義国の崩壊、ローマ法王の至上権復興－新世界秩序構築、大いなる叫び、最後の大迫害、恩恵期間の終了、死の法令、神の民の救出、聖徒の復活等の「これらの異常な出来事」の終わりの諸事件の最後の事を言っているのである。

「『預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ』マタイ24:15、16。初代の弟子たちのように、荒れ果てた、人里離れた場所に逃れ場を見出すように強いられる時は、そう遠くはない。ローマ軍によるエルサレム包囲がクリスチャンに対する逃避の合図となったように、米国が権力を帯びてローマ教の安息日を強要する法令を出すようになったら、それはわれわれに対する警告となる。その時こそ、比較的小さな都会を離れ、山間の人里離れたところに隠れ家を求める準備として、大都会を離れる時である」5T464、465。

「新教教会が手を伸ばし、深淵の向こうにあるローマ教会の権力の手をとり、奈落の向こうにある降神術と握手しようと手をのばす時、また、この三者の結合による勢力下に米国が新教共和国政体としての憲法の原則をことごとく放棄し、ローマ法王のいつわりとあざむきの宣伝に道を備える その時こそ、われわれは、サタンの驚くべき働きがやってきたこと、また、世の終わりの近いことを知るのである。」5T451

われわれの教会は、ダニエル12章に出てくる、3つの預言の期間を過去の中世時代に当てはめてきた。私は長い間、この点について理解に苦しんだ。しかし、今やはっきりしてきた。これは「荒らす憎むべき者」－ローマ法王教がもう一度その権威のしるしを打ち立てる時から、「ひと時とふた時と半時（1260日）、1290日、1335日、その支配、迫害期間、また天から神のみ声が聞こえて、神の民が救出される時までの預言的期間を表しているのである。

「この世界歴史の終末が近づくにつれて、ダニエルが記した預言は我々が住んでいる時代そのものに関するものであるから、特別に注意を払わなければならない」国下156、157。

「ダニエル書12章を読み、研究しよう。それはわれわれすべての者が理解する必要がある（ＳＨＡＬＬ）（未来形）警告である」LETTER161,1903.（世界総会総理A.G.ダニエルとW.W.プレスコットに書かれた）。

ダニエル12章の「預言的期間」は、これから未来に起ることだとすれば、字義通りの期間だろうか、一日を一年と計算する象徴的な期間だろうか。これから先に起ることだとすれば、1260年間、1290年間、1335年間のローマ法王教の支配、迫害、救出までの待ち時間とは考えられない。それとも、過去の中世時代に起ったことを繰り返し述べているだけのことだろうか。

中世時代1500年代に、宗教改革を突き崩すために、二人のイエズス会士が預言解釈に現れた。一人は、ダニエル7章の「小さい角」はずっ

と未来に現れる「反キリスト」だとする、「預言未来成就説」(FUTURISM)を説くリベラであった。もう一人は、「小さい角」は過去に現れた者であって、ギリシアのアンテオカス・エピファネスに適用する、「預言過去既成説」(PRETERISM)を説くアルカザルであった。この両者とも、宗教改革者たちが小さい角はローマ法王だとすることから人々の心をそらすためであった。今日、この二つの汚染された見方によって、まさに傷の癒された口ーマ法王至上権が樹立される直前に住む神の民すらも、時を知り、数えることができなくなっている。そのため危機感はなく、切迫感もない、ラオデキア状態に陥り、無意味な儀式を守る昔の選民ユダヤ人の二の舞を演じているのではなかろうかと危惧されるのである。

今日も、イエスは我々に次のように語ってはおられないだろうか。

「偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。あなたがたは、何が正しいかを、どうして自分で判断しないのか」[新共同訳]ルカによる福音書12:56、57。

我々は日曜休業令が立ったならキリストの再臨までの「期間」は非常に短期間であることを知っている。

では「荒らす憎むべき者が聖なる場所に立つ時」、すなわち日曜休業令は近いのだろうか。

マーヴィン・ムーア「終末における危機が課題」から引用しよう:

「すべての証拠を調べてみて問題は、最終の危機が十戒第四条を焦点とするだろうか、ということではないというのがわたしの結論です。本当の問題は、エレン・ホワイトの明白な預言の見解に、傾向が過去100年にわたりなぜ反対の方向に動いていったのかということです。

そして、その答えは、サタンが二つの大事な教訓を1800年代の終わりの日曜休業令の危機から学んだからだ、と私は信じます。第一にセブンスデー・アドベンチストが日曜休業令を非常に真剣にとっている、ということを学びました。私たちは戦いました。1892年、日曜に働いたためにテネシー州で5人のアドベンチストが逮捕された後、私たちは教会の立場を説明した30万部のトラクトを政府当局者、弁護士と州の人々に配りました。その結果、迫害は止みました。全国レベルでは、A.T.ジョーンズが1880年代の終わりから1890年代初めにかけて、連邦議会に立ち向かった恐れを知らぬ日曜休業令の反対者でした。その結果として、再びそれらの法案は一つ一つ否決されました。

私たちは日曜休業令と戦い、勝利したのです。

私は、サタンが1800年代の終りの日曜休業令

の戦いから退却しながら、傷をなめている様子を想像できます。そして、『この次には、彼らに戦いのチャンスはやらないぞ』と自分に言い聞かせていることも。

サタンはまた、日曜休業令はアドベンチストに終りのしるしであるゆえに、この法律は他の何にもまして彼らを奮い立たせ、キリストの再臨に備えさせることも知りました。そしてサタンが一番望まないことは、アドベンチストが熱心になることです。だからサタンは、日曜休業令を私たちから見えないずっと後ろに置いておくのです。そうすることによって、私たちは、まだ時はたくさんあると考えるでしょう。その間にサタンは影でこっそり働いて、100年前に日曜休業令を阻止した法的障害物(教会－国家分離)を、取り除いているのです。日常の仕事が私たちにもっとはるかに重要と考えさせ、もう遅すぎるところまで私たちを引っ張ってゆくのです。そして猫がねずみにこっそりちかづくようにして、彼は私たちにいきなり飛びかかるのです。ちょうど王手詰めになるまで気づかずにチエスを指している人のように、分かった時はもう遅いのです。それにストップをかける手段が一つもないような、突然の詰手、私たちの予期する日曜休業令が私たちをじっと見つめています。

私の考えでは、それが過去100年にわたって日曜休業令が差し控えられてきた傾向の理由だったのです」

次のような引用文を見ると、確かに日曜休業令の問題は、アメリカのマスコミ等で盛んに取りあげられ、世論となるはずである。しかし、まだまだ日曜休業令は全然問題になっていないように見える。世論となるまでには後数十年はかかるはずだとしか思われない。しかし、本当にそうであろうか。

「政治的腐敗は、正義を愛し真理を尊ぶ思いを破壊しつつある。そして自由の国アメリカにおいてさえ、為政者や議員たちは民衆の歓心を買うため日曜日遵守を強制する法律を求める大衆の要求に屈伏する」大争闘下357。

「しかし、日曜日遵守を強制する問題が広く論じられるとき、長い間疑われ信じられなかった事件が近づいてくるのがわかり、第三天使の使命は、今までになかったような結果をもたらすことであろう」同３７５。

「日曜休業運動が世に迎えられるにつれて、法王教徒は、やがては全プロテスタント世界がローマの旗の下にくだることを確信して喜ぶのである」同170。

「日曜休業運動が、ますます大胆に、ますます断固として推進されるにつれて、戒めを守る人々に対して法令が発布される。」377。

「しかし、安息日問題の危機は、神の民にほとんど、あるいはぜんぜん無警告に突如として立ち現れることは、全く有りうると私は信じます。私はこれを、二つの理由から言うのです。

第一に、エレン・ホワイトがこれらの文を書いた１８００年代の終わりごろ、彼女とアドベンチスト全体は、日曜休業令立法化の要求は、アメリカにおける教会・国家間の壁を打ち壊す問題であると期待していました。時間は、日曜休業令立法化への運動のために必要であったばかりでなく、日曜休業令とともに教会・国家分離の壁を破るためにも必要だったのです。

しかし、私がさきに指摘したように、サタンは１００年の後戦術を変えました。今彼は教会・国家間の壁を壊すために、別な論争を用いています。人工妊娠中絶の抗争と教区学校に対する政府援助の要求がそれです。現在、国家的日曜休業令は、その立法化に要される政治的活動が、百年前のそれに比べると、はるかに少なくなっています。なぜなら、もし今の傾向が続いたら日曜休業令への扇動が表面化するまでに、最高裁はそれの妨げである唯一の法的障壁、教会－国家分離を撤廃しているでしょうから。

なぜ日曜休業令が現在ずっと早くやって来れるかという第二の理由は、百年前よりはるかに速やかに世界が動いているスピードです。国際直通ダイヤルにより、お金と電話があれば誰でも、電話を持っている世界のどこの誰にでも１分で話しができます。お金があれば誰でも、世界のたいていの場所に２４時間以内に行くことができ、世界のもっとも辺鄙なところでさえ、理論的には４８時間以内に着くことができます。

東ヨーロッパの共産諸国は１９８９年の末にいち早く倒れ、アメリカとその連合国は１９９１年初頭にいち早くイラクを制圧し、ソビエト連邦は１９９３年末にいち早く崩壊しました。最終的危機がやってくるのに、どうして何年もかかる必要があるのでしょうか？　私たちが住んでいる世界は、エレン・ホワイトが住んでいた世界とは極めて大きく違っています。やってくる安息日・日曜日の抗争に関する彼女の基本的見方に変わりはないものの、その抗争の実現に至るまでの期間に関する１００年前の彼女の理解は、今なら相当に異なっているであろうと、私は考えます。

日曜休業令は突如として最前面に現れるという考えは、彼女自身の書き物と矛盾しません。将来の神のさばきの突然性について彼女は数多く語っています。『[神の民に]間もなくやってくる目もくらませるような将来の出来事』(１９０３年)について、また『圧倒的な驚きをもって速やかに世界に臨むこと』(１９０４年)について、彼女は語っています。

世界の善と悪の勢力は、衝突コース上にあると私は信じます。特に１９６０年以来、悪の勢力はさらに大胆に露骨になっています。世俗主義はアメリカと西ヨーロッパの公的生活、政府、科学、教育、芸術、ジャーナリズムを含んで、ほとんどあらゆる面を支配しています。その一方で福音的、根本主義的クリスチャンたちは、あるユダヤークリスチャン的価値に類するものを私たちの文化に回復しようと、渾身（こんしん）の戦いをしています。

その取り組み方に私は何か問題を感じるものの、保守的クリスチャンたちは私たちの社会における、極めて現実的な罪の問題を指摘しています。ポルノ、同性愛、性的児童虐待、フリー・セックス、麻薬、アルコール中毒、暴力、肉欲的テレビ番組－と数え上げればいくらでも続きます。純正な宗教がその一方に、世俗的宗教とニュー・エイジが他方に、遅かれ早かれ、私たちの惑星の支配をめぐって互いに最終的対決をせねばなりません。

もしも、この抗争がだんだんと決着するものであれば、政治的現実から見て最終の危機に至るまでに、あと数十年を要することとなるでしょう。しかし、大激変的、世界的自然災害の形における神の超自然的介入は、一夜にして人類を道徳的自己吟味に追いこむでしょう。エレン・ホワイトが示されたマグニチュードの災害

は、最も世俗的な人間さえ揺さぶり『神は私たちに何かを語りかけようとしておられる』と認めます。

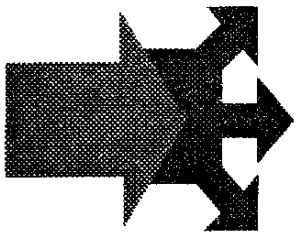
日曜休業令の預言においてエレン・ホワイトが予見した先のばしの政治的活動が、まさに今起きており、そして、それが日曜休業令の背景においてではないことに、私は恐れを感じます。あなたがこれらの言葉を読んでいる時でさえ、政治家、議員たちはプロテスタントによる大衆の要求に屈しており、そのようになるとエレン・ホワイトが言った言葉通りです（大争闘下357参照）。彼らは日曜休業令への要求には動かされませんが、そうした法律を阻む私たちの唯一の防壁、ー教会・国家の分離を壊すようにとの要求には、やすやすと従っています。私たちの目の前でエレン・ホワイトの預言が成就していると、私は信じます。そして、私たちの中の大多数がそのことを理解していません。なぜなら、それは私たちがそうなるだろうと考えたようには起こっていないからです。それが二千年前サタンがユダヤ人に用いたあざむきです。彼が今神の民に同じことを行おうとしているのを見て驚く必要はありません。

アメリカにおける終わりの時の政治情勢に関するエレン・ホワイトの預言で彼女が予見したのは、漸進的な過程でした。日曜休業令を別にして、その過程は今まさに成就しているので、その時が来れば日曜休業令はかなり速やかに可決されると、私は考えます。日曜休業令への要求がかき立てられるまで、それが来てから神との関係を正す間があるかのように、私たちはじっと待っていてはなりません。『圧倒的な不意打ちをもって“目もくらむような力で”』突然のようにやってくる最後の危機に、準備することが私たちへの最緊急の命令です。漸進的にやってくる終わりの出来ごとを待っている人は、その期におよんでも、未だそれを待つことになるでしょう」マーヴィン・ムーア、終末における危機的課題、181－191。

彼は、穏やかのように見える日曜休業令運動が突然、世論となり得るシナリオを述べている。「恐怖と不安で気絶する」ほどの突然の大災害が起きたとする。「いたるところで人々は『神は何かを私たちに語ろうとしている』事を認めます。世界は一つになって霊的な解決を求め、いままで宗教自由を強く支持してきた世の人々は、自分たちの力がもはや去ったことを知ります。天変、世界的自然災害の反動として、恐れでいっぱいになった一般大衆は一つになって、前なら自由を愛好する人たちがたとえひどい悪夢の中でも考えられなかった宗教的法令を求め、それを手にします。こうした法律は非常に早く立法化され『それはなされなければならなかった』ことを誰でも認めるでしょう。宗教的『新世界秩序』はこうしてできあがるでしょう」同193。

「地を満たしている災害は、日曜日を犯している結果であると『指導者たちが』考えるようにさせる。これらの影響力ある人々は、神の怒りをなだめようと日曜礼拝を強制する法律を作る」マラナタ、(1899)、176。

教会合同（エキュメニカル）運動はどこまで来ているだろうか。カトリック、プロテスタント、心霊術の歩み寄りは驚くべきところまで来ていることを知っているだろうか。それは「法王教徒自身が見て驚き、理解しかねるような」（大争闘下３２２）ところまできているのであ



る。キリスト教界ばかりではない。全世界の宗教がローマに合流しようとしている。政治界、経済界にも君臨すると聖書が言っていることが、特に１９９０年代に入って見えてきているではないか。ベルリンの壁崩壊をきっかけに、ソ連の民主化、ヨーロッパ連合（EU）の動き、北朝鮮が食糧危機から助けをローマ法王に懇願すること、キューバのカストロ大統領がローマ法王に助けを求めること、「北の王は戦車と騎兵と、多くの船をもって、つむじ風のように彼を攻め、国々に入っていって、みなぎりあふれ、通り過ぎる」ことを我々は見せられている（ダニエル11:４０）。「全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い」「全ての国民は...彼女のぶどう酒を飲み」「地の王たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは彼女の極度のぜいたくによって富を得」ていることも指摘されている（黙13:３;18:３）。今度のペルーの日本大使公邸における人質問題に毎日の如くシプリアーニ大司教が現れたのは何であったのだろうか。「ローマはその感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。カトリックは至るところで地歩を占めつつある」。しかしそれは「激しい決定的な戦いの準備なのである」(大争闘下322)。彼らは「一撃をくらわす時」を待って「ひそかに、そして怪しまれないように、勢力をのばしつつある。この教会が何よりも望むものは、有利な立場である」(大争闘下341)。イスラム教とキリスト教の和解を促進させる機会として、ヨハネ・パウロ２世は5月10日に初めてレバノンを訪問する。

アメリカでのしるし

アメリカで次のしるしが現れてくるであろう:

1. アメリカは日曜休業令に向かって、バチカンと限りなく近づいていく。
2. その距離が縮まれば縮まるほど、神の保護がアメリカから除かれていく。天災地変が急増する。
3. アメリカ道徳の退廃がひどくなる。
4. アメリカ経済の衰微。神の民は「神の恩寵とこの世の繁栄の回復を妨げる」者として非難される。ということは今のアメリカの経済は破綻するということである。「今、利己的な貯えをして、神のみ業にささげるわずかな資金は、しばらくしてモグラや、コウモリに偶像もろとも投げ捨てられるであろう。お金は永遠の光景の現実が人に見えるようになったとき、突然その価値は下がるであろう」WM.266. アメリカの現実は虚構の繁栄である。
5. プロテスタント、カトリック、心霊術の三重の結合。エキュメニカル運動。
6. 日曜遵守が大衆の要求として盛り上がる。
7. アメリカのプロテスタントによる教会-国家分離政策への激しい攻撃。カーター、レーガン、ブッシュ大統領が再構成した最高裁により、ほとんど達成されようとしている。現在アメリカの最高裁判事9人中6人はカトリックであるという。クリスチャン右翼の動きはめざましい。まもなく突然「常供が取り除かれる」(ダニエル

12:11）であろう。

この「常供」とは何であろうか。「支配権、統治権、国家に課せられている拘束」である。これがアメリカで取り除かれるとどうなるだろうか。

「現在諸国家の政府によって課せられている数々の拘束が取り除かれ、ローマが以前の権力を取り戻すとき、たちまち圧制と迫害が復活するであろう」（大争闘下319）。

「教会－国家の分離」の法律が、日曜休業令を「阻止している」のである。

「不法の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時までのことである。その時になると、不法の者が現れる」2テサロニケ2:7、8。

一方、わが教会の中では、

1.「平和だ、無事だ、教会は繁栄している」の叫び。
2.セレブレーションの増加
3.預言の研究、教理、現代の真理から離れていく。
4.少数の忠実な者と、多数の広い道を行くグループが教会内で色濃く分離していく。

「荒らす憎むべき者」が立てられる時は非常に近い。新世界秩序、世界政府の樹立が間近に迫っている。とすれば、大患難の時、7つの災害の時、かつてない大迫害の時、「容赦なく吹きまくる大いなる嵐」が非常に迫っている。1260日、1290日、1335日したら神の民が救出される。各時代の聖徒たちの希望、キリストの再臨は非常に近いということが分かる。このダニエル書12章の「預言の期間」の解読のためには、ダニエル書の預言を順序、連続性、前進性から研究し直す必要があると痛感する次第である。今「終わりの時の終わり」についての預言が解明されようとしている。

こんな事を言うと、日時を設定することになると、証の書を引用して反対する人がいるであろう。私も長い間そう思い続けてきた。私は、1844年以後は「もう時がない」と言われている、E.G.ホワイトは「時はテストにならない」「預言的期間は1844年で終わった」という言葉が曲解されていることが最近分かった。一見相反するように見えるE.G.ホワイトの言葉は矛盾しないのである。これらのことの細かい証明は別の機会にする。ただ、結論を言っておこう。キリストの再臨、恩恵期間の終了、後の雨、日曜休業令の日時を設定することはしてはならない。E.G.ホワイトが黙示録10:5、6「もう預言的期間がない」と言っておられる意味は2300年に関わることであって、それは1844年で終わったことであるという意味で、再臨の時を設定しようとする者たちへの警告であった。黙示録にも「災害は一日（一年）のうちに彼女を襲う」「千年期」などの「預言の期間」がある。

「聖書の中には、特に我々の時代に関係する真理が提示されている。

聖書の預言は人の子が現れる直前の期間に焦点を当てている。... 大終結の前夜まで延びているダニエルの預言的期間は、その時起る諸事件にあふれるほどの光（光の洪水）を投げかけてる。黙示録もまた、最後の世代のために警告と教えに満ちている。...

誰も無知のままでいてはならない。神の日の到来に備えができていないということがあってはならない。RH, 9-25, 1883「大終結」とは、「キリストの再臨の時. . . 大いなる終結の時」大争闘下11のことである。

そしてこの際、読者の方々もぜひ、ダニエル書、黙示録の再読、再研究をして頂きたいと思うのである。

3. 地上歴史は約6千年

ダニエル書12章に預言されているように、キリストの再臨、世の終わりは非常に近いということを知ることができるもう一つの確証は、預言者E.G.ホワイトの「地上歴史約6千年」という言明である。そのことが彼女の書き物に42回も出てくる。創造からキリスト誕生まで4千年が41回も出てくる。E.G.ホワイトを学問的でないとする人は、彼女は当時のアッシャー年代記に従っていたのだと軽蔑する。彼女は所有する1、200冊の非SDAの著者の本のうち、数冊が年代記に関する本であるが、彼女はわずかな違いはあるとしてもアッシャーのものを真として使った。(最近出版の、G.E.リード著「まさに戸口に」を参照)

ミニストリー誌1984年4月号にW.ジョーンズはこう結論づけている:

「大司教アッシャーの研究に向けられてきたすべての非難にもかかわらず、当時使われていたどの年代よりも、現代考古学の衝撃からほとんど傷つけられていない。つまり、E.G.ホワイトは彼女に入手できる最善のものを使うように神によって導かれたとわたしは信じる。アッシャーの年代は、その聖書データの細部にいたるまで忠実であったことと、推測、憶測を挿入することを拒んだためにほとんど改訂する必要がなかった。もし、E.G.ホワイトが今日生きておられたら、聖書の記録に最も忠実であることに執着したその年代記を擁護するであろうことは疑えない」P23。

「聖書は、人類のもっている最も古い広範な歴史である。それは永遠の真理の泉から出た新鮮な流れで、各時代を通じて神のみ手によってその清純さが保たれたのである。それは、人間がどんなに研究しても見通すことのできない遠い過去を照らしている。地の基礎をすえ、天をのべた能力は、ただ神のみ言葉の中にしか見られない。諸国民の起源について信頼すべき記録は、ただ聖書の中にのみ見出される。人間の自負心や偏見に汚されない人類歴史の記録は聖書の中にだけある」教育205。

ここで注意して頂きたい。地上歴史は「約」6千年と言っておられるということだ。紀元2000年以前になるか、その後数年になるかは誰も分からない。いずれにしても、残されているのは後わずかである。この短期間に福音は「あかしをするために」全世界に宣べ伝え終るのだろうか。教会は「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなくて、清くて傷のない、栄光の姿」に変えられるのであろうか。この数年のうちに日曜休業令は立つのだろうか。大迫害がすぐ来るのであろうか。もしそうだとすると、我々は今何をすればいいのであろうか。まだなさねばならない準備の働きがあるのであろうか。まだ神が与えられる光があるのであろうか。新しい

義務があるのであろうか。まだ清められなければならない特別な働きがあるのであろうか(大争闘下140、141。「主よ、わたしは何をしたらよいのでしょうか」(使徒22:10)と真剣に問う時ではないだろうか。

「救い主は十字架におかかりになる前に、弟子たちに、ご自分が殺され墓からよみがえられることを説明された。そして天使たちがその場にいて、主のみ言葉を頭と心に深く印象づけた。しかし、弟子たちは、この世においてローマのくびきから解放されることを期待していたので、彼らの望みの中心である主が不名誉な死を受けられなければならないという思いに耐えられなかった。彼らが覚えていなければならなかったみ言葉は、その心から消え去り、試練の時がやってきた時には備えができていなかった。イエスの死は、まるで主が何の予告もしておられなかったかのように、彼らの望みを徹底的に打ち砕いたのであった。キリストのみ言葉によって弟子たちに将来がはっきり示されていたように、我々にも将来のことが預言の中にはっきり示されている。恩恵期間の終りに関係のあるできごと、悩みの時のために備える働きとが、はっきり示されている。しかし多くの人々は、ぜんぜん啓示を受けなかったかのように、これらの重要な真理を理解していない。サタンは、彼らに救いにいたる知恵を与えるような感化をことごとく奪い去ろうとうかがっているので、彼らは悩みの時に備えができていない」大下３５９、360

「悩みの時」は、最後の戦いの時、かつてないほどの迫害の時である。

時を知ることは我々の救いと関係があるのだろうか？

ダニエル書、特に最後の部分を「賢い者は悟るであろう」と言われている。イエスもダニエル書を「悟れ」と言われた。

「いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣いて言われた、『もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。いつかは、敵が周囲に塁を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである』」ルカ19:41-44。

「そのようにいまわれわれは、キリストの再臨と世にのぞもうとしている滅亡について警告が与えられている。この警告に注意する者は救われるのである」３希望102。

「人間は、神があわれみのうちにお与えになった警告を拒否して無事ではあり得ない。. . . そして彼らの救いは彼らがその使命をどう受けるかにかかっている」大争闘下149。

「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨てて、わたしの祭司としない。あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる」ホセア4:6。

Ⅲ. 備えを知る－自らの武装－神のプログラム

我々は敵のプログラムを知るだけでは十分ではない。神のプログラムを熟知していなければならない。

1．環境的な準備－いなかに出よとのメッセージは、確かに神からのものであり、神からのプログラムである。

2．知的な準備－「聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、誰も最後の大争闘に耐え抜くことはできない」大争闘下359。

「真理にしたがって魂を清める」(大争闘下378)

3．心の準備－「実体として大いなるあがないの日に当たる今日、神のみ前における態度において、自分たちの罪を悔い改め告白するという立場を占める者たちだけが、神の保護を受けるにふさわしいものと認められ印されるのである」牧師への証445。

「今や、サタンはこの印する働きの時に当たり、あらゆる手段を用いて神の民の心を現代の真理から引き離し、彼らを迷わせようとしている。わたしは、神が悩みの時に神の民を守るために、彼らの上にかけておられる覆いを見た。そして、真理の側に立つ心の清い者は、全能の神の覆いに隠されるのであった」初代文集107、109。

「福音の使命をわが教会に高らかにひびかせ、彼らを世界的な働きに召集しよう。教会員は、彼らの見えない、天の同盟軍から、尽きることのない知識の源から、彼らが従事する計画の偉大さから、また、彼らの指導者なる神のみ力から熱意を得て、信仰を深めよう。自ら神に従い、導きと指導を仰ぐ人々は神が起るとお定めになったさまざまの出来事の着実な足音を聞くであろう。世の人々の生命のためにご自分のいのちをお与えになったお方の霊に励まされ、彼らはもはや、自分たちのできないことを指し示して無力に立ちつくすことはない。彼らは天の武具をまとい、自発的に戦争に出て行き、全能の神が必要を満たしたもうことを知って、神のためには危険をもいとわない」ク奉仕107。

「われわれは覚醒しよう。戦いがかわされている。真理と誤謬は、その最後の闘争に近づいている。われわれは、インマヌエル王子の血潮に染まった御旗のもとに行進し、信仰の戦いを立派に戦い抜いて、永遠の名誉を獲得しよう。真理はやがて勝利し、われわれを愛してくださったお方を通してわれわれはいよいよ勝利者になれるからである。恩恵期の貴重な時間の終わりは迫っている」クリスチャンの奉仕１０７

行進命令が出されている。

「かつてウエリントン公爵は、クリスチャンたちが異教徒たちの中で伝道集会を開く場合、成功の可能性があるかを論議していた会に出席した。彼らは公爵にそのような伝道集会が出費に比較して成功しそうかどうか公爵の意見を聞かせてほしいと言った。その老将軍はこう答えた。『皆さん、あなたがたの行進命令は何ですか。成功は、あなたがたが論議する問題ではありません。あなたがたの命令を正しく読むと〝全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ〟と書かれています』と。」ク奉仕１０８

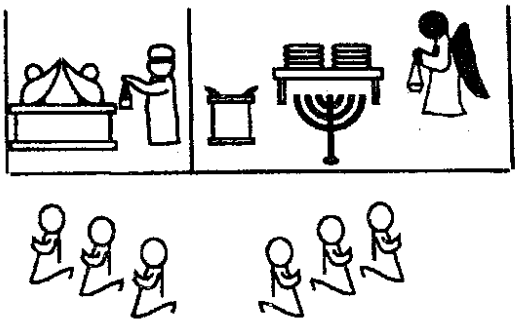
今こそ印を受ける時！

「...今こそ、神の律法がわれわれの思いと額にかくされ、心の中に書き記されなければならない時である。主は、心が世の思い煩いに満たされることの危険をわたしに示された。わたしはある人々が他の刺激的な本を読んで、現代の真理と聖書を愛する心から引き離されていくのを見た. また、他の人々は、飲食や衣服のことで心が悩みと苦労に満たされていた。ある人々は、主が来られるのははるか速い先のことだと思っている。時は、彼らが期待したよりは数年長く続いた。そのために彼らは、時がさらに数年続くものと考える. このようにして、彼らの心は、現代の真理から引き離されて世に従っていく。わたしはこうしたことのなかに大きな危険を見た。もしわれわれの心が他のことで満ちているならば、現代の真理は心からしめ出されて、額には生ける神の印を押す場所がない。イエスが至聖所におられる時は、ほとんど終了し、時は、あとわずかしか続き得ないことをわたしは見た。われわれの空いた時は、聖書の研究のために費やさなければならない。この聖書が、最後の日にはわれわれをさばくのである。

愛する兄弟姉妹がた、神の戒めとイエス・キリストのあかしを常に心に抱いていよう。そして、それに世の思いと煩いを閉め出していただこう。寝る時も起きる時もこれを瞑想しよう・人の子の来られることを常に考えて生活し、すべての行動をとろう。印する時は、非常に短くやがて過ぎ去ってしまう。四人の天使が四方の風を引き止めている今こそ、われわれの召しと選びとを確かなものにする時である」初代文集129－130。

どこで、いつどのように我々は完全な武装をするのであろうか。

天の至聖所で、大祭司、我らの大将イエスのもとで「キリストの恵みと彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない」「清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない」「この働きがなし遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。... その教会はしののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者である（雅歌6:10）」。大争闘下141。



至聖所でイエスの最後のあがない、最後の戦う仕上げの訓練を受ける、

「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するとき、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除

いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる。(ゼカリヤ3:4)キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。...サタンが告発をしていたとき、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印をおしていた」。(国と指導者下巻p196)

初代文集の詳しい描写を見てみよう:

「わたしは、深い信仰と苦悶の叫びをあげて、神に嘆願している人々を見た。彼らの顔は青ざめ、深い憂いの色を帯びていて、彼らの内的苦闘を表していた。その表情には、堅忍不抜の精神と非常な熱心さとが表れていた。彼らの額からは、大きな汗のしずくが落ちた。彼らの顔には、時々、神の嘉納のしるしが輝くのであったが、また、元の同じ厳粛で熱心さと憂慮に満ちた表情にもどるのであった。

祈っている人々が、彼らの熱心な叫びをつづけていると、時々、イエスからの光が彼らに輝き、彼らの心を励まし、彼らの顔を輝かせた。ある人々は、この苦闘と祈りに加わらないのをわたしは見た。彼らは、不注意で無関心なように見えた。彼らは、回りの暗黒に抵抗しようとしなかったので、暗黒が厚い雲のように彼らを囲んだ。神の天使たちは、この人々を去って、熱心に祈っている人々を助けに行った.悪天使たちに抵抗するために全力をあげて戦い、忍耐強く神を呼び求めて努力しているすべての者を助けるために、神の天使たちが急いでいくのをわたしは見た。しかし、神の天使たちは、自らを助けようと努力しない人々を去った.そして、わたしは彼らを見失ってしまった。

わたしは、わたしが見たふるいの意味をたずねた。そして、それは、ラオデキヤ教会へのまことの証人の勧告が生じさせた率直なあかしによるものであることを、わたしは示された。これは、受ける者の心を動かして、高く旗をかかげさせ、率直な真理を語らせる。ある者は、この率直なあかしを聞くにたえない。彼らは、それに反対して立ち上がる。そして、これが、神の民の間にふるいが行われる原因となるのである。

わたしは、真の証人のあかしが、その半分も注意されないのを見た。教会の運命がかかっている厳粛なあかしが全く無視されないとしても、軽視されている。このあかしは、深い悔い改めを呼び起こすべきものである。それを共に受け入れるすべての者は、それに従って清められるのである。

天使は、「聞きなさい」と言った。やがて、わたしは、多くの楽器が、完全に調和して、美しい音楽をかなでているのを聞いた。それは、わたしがこれまでに聞いたこともない美しい音楽で、恵みとあわれみに満ち、高尚で聖なる喜びにあふれていた。それは。わたしの全身を感動に震わせた。天使は「見なさい」と言った。すると、わたしは前に大いにふるわれるのを見たその一団の人々に注目した。わたしは、前に涙を流し、苦悶しているのを見たその人々を見せられた。彼らの周りの守護の天使は二倍に増やされた。そして

人々は、頭から足まで、武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように規律正しく動いた。彼らの顔は、彼らの耐えてきた激しい争闘と経てきた苦悶とを表していた。しかし、彼らの容貌は、激しい内的苦悶のあとがあったとはいえ、今は、天の光と栄光に輝いていた。彼らは、勝利を得た。そして、彼らは、深い感謝にあふれ、聖なる喜びにみたされていたのである。

この一団の数は減少していた。ある者は、ふるい落とされて、途中に残された。勝利と救いを尊んでそのために忍耐強く嘆願し苦悩した人々に加わらなかった不注意で無関心な人々は、それにあずからず、暗黒のうちに取りのこされた。そして、彼らの場所は、真理を信じて隊列に加わる人々によって、直ちに補充された。悪天使たちは、なお彼らの回りにつめ寄ったが、彼らに打ち勝つ力はなかった。

わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。多くの人々が縛られていた。夫に縛られていた妻もあれば、親に縛られていた子供もあった。真理を聞くことを妨害されていた心の正しい人々は、今、熱心に真理を自分たちのものにした。親族を恐れる気持ちは全くなくなった。そして、真理だけが彼らの前で高められたのである。彼らは、飢え渇くように真理を求めていた。真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった。わたしは、何がこのような大きな変化をもたらしたのかをたずねた。

『それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである』と天使は言った。

大いなる力が、これらの選ばれた人々と共にあった。天使は、「見なさい」と言った。わたしの注意は、悪人たち、すなわち信じない者たちに向けられた。彼らは騒ぎ立っていた。神の民の熱心と力とが彼らを刺激し怒らせた」初代文集437－440。

「北の王＝ローマ法王教」が新世界秩序を構築し、ついに平和の副千年期がきたと有頂天になって世界に君臨するとき、全世界が「新世界秩序」「世界統一政府」を祝うとき、神もご自分の民を「人手によらずして」用意され、ローマ法王帝国の安泰を乱し、彼らを怒らせる。こうしてダニエルの預言が成就する。「しかし、東と北からの知らせが彼を驚かし、彼は多くの人を亡ぼし絶やそうと、大いなる怒りをもって出て行きます」ダニエル11:44。

こうして「光と義の完全な武具で武装し、教会は彼女の最後の戦いに突入する」（TM17）のである。

最後の戦いにおいて、真理は勝利するということが神のシナリオである。

編集後記：

「わが愛する者の声が聞える。見よ、彼は山をとび、丘をおどり越えて来る。
わが愛する者はかもしかのごとく、若い雄じかのようです。見よ、彼はわたしたちの壁のうしろに立ち、窓からのぞき、格子からうかがっている。
わが愛する者はわたしに語って言う、「わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って、出てきなさい。
見よ、冬は過ぎ、雨もやんで、すでに去り、
もろもろの花は地にあらわれ、鳥のさえずる時がきた。山ばとの声がわれわれの地に聞える。
いちじくの木はその実を結び、ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ。わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って、出てきなさい」雅歌2:8～13

これは雅歌書の研究で、ヨーロッパの宗教改革の時のことを表現しているという。中世時代の冬の長い法王支配から、宗教改革の春がやってきたように、最後の宗教改革に目覚めるときが来たのではないでしょうか。最後の諸事件に関するダニエル書、黙示録の預言の解釈に、戸惑い、異論があると思いますが、ぜひ集中的研究がなされなければならないと思います。読者の皆さんにそのことを訴えます。そして学んだことを分かち与える研究会、セミナーを持てるよう希望するものです。

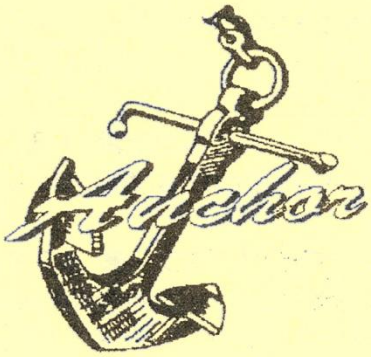
広告：

● 改訂版「前途の危機」 ロバート.W.オルソン編 １８００円
証の書から編集：前にこの本を購入された方は、お取り替えしますので申し出てください。

● 「預言の謎と新世界秩序」 デビット・ミラー著 ８３０円(送料共)
ダニエル、黙示録を初心者のために用意した本。１８２頁の手軽な、要点をとらえた本。
注文：ファイナル・アワー・ミニストリー、またはサンライズ・ミニストリー
郵便振替口座：０１０９０－７４５２８

● "Warning" by M.G.Berry １５００円
ダニエル１２章のタイムライン(時刻表)１２６０日、１２９０日、１３３５日の聖書的解釈を紹介。キリストの再臨、恩恵期間の終了、日曜休業令の日時を設定するのでなく、諸事件が順序を追って「大終結の前夜まで洪水の如く光を投げかけている」預言の解明。預言の釈義の原則も紹介。「荒らす憎むべき者」「常供の燔祭が取り除かれる」「終りの時」「もう時がない」等... を解説。預言研究者の必読書。
ただ今、日本語に翻訳中。英語版の在庫はあります。

この印刷物は信徒の皆様の祈りと自由献金によって続けられています。
資料代や献金などの送金には郵便振り替えをご利用ください。
振替口座番号は下記の通りです。
０２０８０－０－１２１２１　　サンライズ・ミニストリー
住所： 〒905-04　沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
サンライズ・ミニストリー出版部　　金城重博
皆様のご意見、ご感想などをお待ちしております。
ＴＥＬ： 0980-56-2783 FAX：0980-56-2881 E-Mail： anchor@cosmosnet.or.jp


Ankor